

コリント人への前の書

第一章

一 神の御意により召されてイエス・キリストの使徒となれるパウロ及び兄弟ソステネ、二書をコリ
 ントに在る神の教會、即ちいづれの處にありても、我らの主、ただに我等のみならず彼らの主なる
 イエス・キリストの名を呼求むる者とともに聖徒となるべき召を蒙り、キリスト・イエスに在りて潔められたる
 汝らに贈る。三願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。

四 われ汝らがキリスト・イエスに在りて神より賜はりし恩恵に就きて常に神に感謝す。五 汝らはキリストに
 在りて、諸般のこと即ち凡ての言と凡ての悟とに富みたればなり。六 これキリストの證、なんぢらの中に堅うせ
 られたるに因る。七 斯く汝らは凡ての賜物に缺くる所なくして我らの主イエス・キリストの現れ給ふを待てり。
 八 彼は汝らを終まで堅うして我らの主イエス・キリストの日に責むべき所なからしめ給はん。九 汝らを召して其
 の子われらの主イエス・キリストの交際に入らしめ給ふ神は眞實なる哉。

一〇 兄弟よ、我らの主イエス・キリストの名に頼りて汝らに勸む、おのおの語るところを同じうし、分争する
 事なく同じ心、おなじ念にて全く一つになるべし。二 わが兄弟よ、クロエの家の者、なんぢらの中に紛争あること

- イ羅一五・三二 哥後二徒一八・一七
- 一・一、八・五 弗一 一 徒一八・一を見よ
- 一・一 西一・一 提後一 提前二・八
- 一・一 (イ羅一・一〇) ト 哥前一〇・三二を見よ
- 哥後八・五
- 口 羅一・一を見よ
- ハ (徒一・一五)
- 二 徒一八・一七
- ホ 徒一八・一を見よ
- ヘ 提前二・八
- ト 哥前一〇・三二を見よ
- チ 徒七・五九を見よ
- リ 羅一・七
- 又 羅一・七を見よ
- 八・二八
- ル 哥前六・一一 (哥前一・三〇)
- 一・三〇
- ヲ 羅一・七を見よ
- ワ 羅一・八を見よ
- カ 哥後八・七 羅一五
- 一四を見よ
- 三 一四を見よ
- 三 一四を見よ
- 二 二〇 路一七・三〇
- レ 羅八・一九 腓三・二〇 路一七・三〇
- ツ 哥前五・五 哥後一・一四 腓一・六、一
- ナ 約一・三
- 〇、二・一六 撒前
- 五・二一 撒後二・二
- 彼後三・一〇
- (路一七・二四)
- 本 羅八・二八を見よ
- 彼前五・一〇
- 一、二一
- ラ 申七・九 賽四九・七
- 哥前一〇・二三 哥後一・一八 撒前五・二四 撒後三・三
- 提後二・一三 多一・二四 多一・二三、二
- 來一〇・二三、一
- オ 彼前五・一〇
- ク 羅一六・一〇、一一
- ム 羅一・二三を見よ
- ウ 羅一・二、一を見よ
- 井 哥前一・一八
- ノ 羅一・二、一六を見よ
- (腓一・二七)

二六 兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる智き者おほからず、能力ある者おほからず、貴きもの多からず。二七 されど神は智き者を辱しめんとて世の愚なる者を選び、強き者を辱しめんとて弱き者を選び、二八 有る者を亡さんとて世の卑しきもの、輕んぜらるる者、すなはち無きが如き者を選び給へり。二九 これ神の前に人の誇る事なからん爲なり。三〇 汝らは神に頼りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて汝らの智慧と義と聖と救贖とに爲り給へり。三一 これ「誇る者は主に頼りて誇るべし」と録されたる如くならん爲なり。

第二章

一 兄弟よ、われ曩に汝らに到りしとき、神の證を傳ふるに言と智慧との優れたるを用ひざりき。二 イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給ひし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。三 我なんぢらと偕に居りし時に弱く、かつ懼れ、甚く戦けり。四 わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御靈と能力との證明によりたり。五 これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん爲なり。

六 然れど我らは成人したる者の中に智慧を語る。これ此の世の智慧にあらず、又この世の廢らんとする司たちの智慧にあらず、七 我らは奥義を解きて神の智慧を語る、即ち隠れたる智慧にして神われらの光榮のために世の創の先より預じめ定め給ひしものなり。八 この世の司には之を知る者なかりき、もし知らば榮光の主を十字架に釘けざりしならん。九 録して「神のおのれを愛する者のために備へ給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞

イ 羅一・二九を見よ、ヘ 羅四・二七
ロ 哥前二・二〇、二・ト 弗二・九
ハ 太二・二五、チ 羅八・二を見よ
ニ 雅二・五、リ 哥前四・一五
ホ 伯三四・一九 哥前、又 哥後五・二一、腓三
二・六 (撒後二・八、九、耶二三・五六、六、
來二・二四) 三三・二六
ル (哥前二・二、六、一、ヨ 哥前二・一七を見よ
一 撒前五・二三) 哥前二・四、二三
ヲ 弗一・七、一四、四一、夕 哥前二・二三を見よ
二 二四を見よ、及 及 羅三・
レ (徒二八・二、哥前六、
ノ 哥前四・一〇、哥後、
一〇・一〇、一一、ラ 哥後四・七、六、七、
井 哥前二・二〇、及び
ヤ 羅八・二九、三〇を
見よ
三〇、二二・五、九、
一〇、一三・四、九、
ム 哥前四・二〇、弗四
ツ 賽一九・一六、哥後、
七・一五、弗六・五
ナ 羅一・一五、一九を見よ
ウ 哥前二・二八、西一
ク (來一・二、一、一・三)
ヤ 羅八・二九、三〇を

コ約一四・二六を見よ ア敬二〇・二七
 エ太一一・二五、一三 サ(羅八・二五)
 一・一六、一七 キ哥前一・二七を見よ
 加一・二二 弗三・ ユ哥前一・二七を見よ
 三・五 哥前一・二四
 ナ(羅一一・三三) ヌ(哥前一・五・四四、四
 五 歐二・二四) 六 雅三・一五 猶六・一
 一九) ミ約一四・二七
 (猶一九) シ哥前一・二八を見よ
 エ哥前三・二、七、四
 〇、一四・三七 加 イ羅七・一四(哥前二
 一四)
 比約壹二・二〇を見よ
 七 羅一一・三四を見よ
 七(約一五・一五)
 ス哥前二・一五、一四
 二七 加六・一
 一四) 八 來五・一三(哥前二
 六 弗四・一四)
 九 來五・二二、二三 彼
 前二・二
 二約一六・二二
 一三 羅一一・二六
 (哥前三・一〇)
 一八 提前一・二二
 一八 徒一八・四一、一、
 一八 哥前四・一五、
 弗三七 西一・二
 三、二五 撒前三・二
 (羅一五・一六 哥後
 三、三、四、一、五、
 一八 提前一・二二)
 九・一、一五・一 哥
 後一〇・一四、一五
 一 徒一八・二七
 (哥前一・二二)

〇 かず、人の心いまだ思はざりし所なり』と有るが如し。一〇 然れど我らには神これを御霊によりて顯し給へり。
 二 御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。二 それ人のことは己が中にある靈のほかに誰か知る
 人あらん、斯のごとく神のことは神の御霊のほかに知る者なし。三 我らの受けし靈は世の靈にあらず、神より出
 づる靈なり、是われらに神の賜ひしものを知らんためなり。三 又われら之を語るに人の智慧の教ふる言を用ひ
 ず、御霊の教ふる言を用ふ、即ち靈の事に靈の言を當つるなり。四 性來のままなる人は神の御霊のこことを受け
 ず、彼には愚なる者に見ゆればなり。また之を悟ること能はず、御霊のこことは靈によりて辨ふべき者なるが故な
 り。二五 されど靈に屬する者は、すべての事をわきまふ、而して己は人に辨へらるる事なし。二六 誰か主の心を知り
 て主を教ふる者あらんや。然れど我らはキリストの心を有てり。

第三章
 一 兄弟よ、われ靈に屬する者に對する如く汝らに語り。二 われ汝らに乳のみ飲ませて堅き食物を與へざりき。汝等
 リストに在る幼兒に對する如く語り。三 今もなほ食ふこと能はず、今もなほ肉に屬する者なればなり。汝らの中
 そのとき食ふこと能はざりし故なり。三 今もなほ食ふこと能はず、今もなほ肉に屬する者なればなり。汝らの中
 に嫉妬と紛争とあるは、これ肉に屬する者にして世の人の如くに歩むならずや。四 或者は『われパウロに屬す』
 といひ、或者は『われアポロに屬す』と言ふ、これ世の人の如くなるにあらずや。五 アポロは何者ぞ、パウロは
 何者ぞ、彼等はおのおの主の賜ふところに隨ひ、汝らをして信ぜしめたる役者に過ぎざるなり。六 我は種々、ア

コリント前書 一一・一〇—三・六

七 ポロは水灌げり、されど育てたるは神なり。七されば種うる者も、水灌ぐ者も數ふるに足らず、ただ尊きは育て
九八 たまふ神なり。八種うる者も、水灌ぐ者も歸する所は一つなれど、各自おのが勞に隨ひて其の値を得べし。九我
らは神と共に働く者なり。汝らは神の島なり、また神の建築物なり。

一〇 我は神の賜ひたる恩恵に隨ひて熟練なる建築師のごとく基を据ゑたり、而して他の人その上に建つるな
二 里。然れど如何にして建つべきか、おのおの心して爲すべし、二既に置きたる基のほかは誰も据うるること能は
三 ず、この基は即ちイエス・キリストなり。三人もし此の基の上に金・銀・寶石・木・草・藁をもつて建てなば、

四 各人の工は顯るべし。かの日これを明かにせん。かの日は火をもつて顯れ、その火おのおの工の如何を驗す
五 べければなり。四その建つる所の工、もし保たば値を得、五もし其の工、焼けば損すべし。然れど己は火より
七六 脱れ出づる如くして救はれん。六汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御靈なんぢらの中に住み給ふを。一七人
もし神の宮を毀たば神かれを毀ち給はん。それ神の宮は聖なり、汝らも亦かくの如し。

一八 誰も自ら欺くな、汝等のうち此の世にて自ら智しと思ふ者は、智くならんために愚なる者となれ。一九そは
二〇 此の世の智慧は神の前に愚なればなり。録して「彼は智者をその惡巧によりて捕へ給ふ」二〇また「主は智者の念
の虚しきを知り給ふ」とあるが如し。二三さらば誰も人を誇とすな、萬の物は汝らの有なればなり。二三或はパウ
ロ、或はアポロ、或はケパ、或は世界、あるひは生、あるひは死、あるひは現在のもの、或は未來のもの、皆な

イ(哥前二五・一〇) 一三三 チ(撒前三・二) 四・八來一〇・二五 一三二 五(賽五・二二) 哥後六
ロ(哥前三・一四、四) 一六 弗二 一〇(賽二八) 及び哥前一・八を見 カ羅六・一六を見よ レ(哥前一・二〇)を見よ
五、九・一七(加六) 一〇 二二 二六 彼前二・四 一〇 一五 三 哥前六・一九 哥後 ソ(哥前一・二二)を見よ
ハ可一六・二〇 哥後 七 彼前二・五 一六 一 哥前四・五 見よ 六・二六 弗二・二二 ツ(哥前一・二〇)を見よ
六・一 一五 二〇 二〇を見よ 又撒後一・七一 一〇 一 三 三(伯二三・一) 九を見よ(提前三・ 一五) ナ(詩九四・一) 一
ニ(賽六一・三太一五) 一 二二 提後一・二二、一八、 〇 詩六六・一〇、 一五) ラ(哥前四・六) 一五) 井(羅八・三八) 一五)

ノ 哥前一五・二三 哥 羅一六・二六を見よ コ 羅二・一六を見よ 前三八
 後一〇・七 加三・マ 多一・七 彼前四・ (約二二・二二) サ 哥前一・一九、三 二・一八 羅八・三六を見よ 〇、三・一八
 二九 一〇 エ 大七・一 羅二・一 一、三・一九、二〇 三、六 彼前四・一 五 來一〇・三三 セ 哥前二・三を見よ
 オ 哥前一・三、一 ケ 哥後一・二二 (徒二三・一) テ 哥前二・二二を見よ 六 哥前一・一八を見よ 哥後一・三・九
 五・二八 (徒二三・一) (雅五・九) 哥前二・四 〇 (黙三・一七、一八) 六・二四 哥後一・二・三二
 ク 路一・二を見よ フ 詩一四三・二 羅二 ア 哥後一〇・一八 羅 二 哥前四・一八、一九、シ 哥前一五・三一 哥 七 哥後一・二・三二
 ヤ 羅一・二五を見よ 一・三三 二・二九を見よ 哥 八・一、一三、四 西 後一・二三 及び (哥前一・一九、二) イ 徒一八・三を見よ

三 ンぢらの有なり。二三 汝等はキリストの有、キリストは神のものなり。

二 一人、宜しく我らをキリストの役者また神の奥義を掌どる家司のごとく思ふべし。ニさて家司に求

第四章

三 びべきは忠實ならん事なり。三 我は汝らに審かれ、或は人の審判によりて審かるることを最小き事

四 とし、また自らも己を審かす。四 我みづから責むべき所あるを覺えぬど、之に由りて義とせらるる事なければな

五 り。我を審きたまふ者は主なり。五 然れば主の來り給ふまでは時に先だちて審判すな。主は暗にある隠れたる事

を明かにし、心の謀計をあらはし給はん。その時おのおの神より其の譽を得べし。

六 兄弟よ、われ汝等のために此等のことを我とアポロとの上に當てて言へり。これ汝らが『録されたる所を

七 踰ゆまじき』を我らの事によりて學び、この人をあげ、かの人を貶して誇らざらん爲なり。七 汝をして人と異な

八 らしむる者は誰ぞ、なんぢの有てる物に何か受けぬ物あるか。もし受けしならば、何ぞ受けぬごとく誇るか。八

九 なんぢら既に飽き、既に富めり、我らを差措きて王となれり。われ實に汝らが王たらんことを願ふ、われらも共

ニ 給へり。實に我らは宇宙のもの、即ち御使にも、衆人にも、觀物にせられたるなり。一〇 我等はキリストのために

愚なる者となり、汝等はキリストに在りて慧き者となれり。我らは弱く汝らは強し、汝らは尊く我らは卑し。二

三 今の時にいたるまで我らは飢ゑ、渴き、また裸となり、また打たれ、定まれる住家なく、三 手づから働きて勞し、

三 罵らるるときは祝し、責めらるるときは忍び、(一) 譏らるるときは勸をなせり。我らは今に至るまで世の塵芥のごとく、萬の物の垢のごとく爲られたり。

二四 一四 わが斯く書すは汝らを辱しめんにあらず、我が愛する子として訓戒せんためなり。一五 汝等にはキリストに於ける守役一萬ありとも、父は多くあることなし。そはキリスト・イエスに在りて福音により汝らを生きた

一七六 一七 我なればなり。一六 この故に汝らに勸む、我に效ふ者とならんことを。一七 之がために主にありて忠實なる我が愛子テモテを汝らに遣せり。彼は我がキリストにありて行ふところ、即ち常に各地の教會に教ふる所を汝らに

一九八 一八 思ひ出さしむべし。一八 わが汝らに到ること無しとして誇る者あり。一九 されど主の御意ならば速かに汝等にいたり、誇る者の言にはあらで、その能力を知らんとす。二〇 神の國は言にあらす、能力にあればなり。二一 汝ら何を欲

するか、われ答をもて到らんか、愛と柔和の心をもて到らんか。一現に聞く所によれば、汝らの中に淫行ありと、而してその淫行は異邦人の中にもなき程にして、

第五章

或人その父の妻を有てりと云ふ。二斯てもなほ汝ら誇ることをなし、斯る行爲をなしし者の除かれんことを願ひて悲しまざるか。三われ身は汝らを離れ居れども、心は偕に在りて其處に居るごとく、斯ることを

四 行ひし者を既に審きたり。四 即ち汝ら及び我が靈の、我らの主イエスの能力をもて偕に集らんととき、主イエスの名によりて、五 斯のごとき者をサタンに付さんとす、是の肉は亡されて、其の靈は主イエスの日に救はれん爲

イ彼前三・九
ロ約一五・二〇を見よ
一六徒一九・二一、ム利一八・八、申二二
一七約一五・二〇を見よ
一八約一五・二〇を見よ
一九約一五・二〇を見よ
二〇約一五・二〇を見よ
二一約一五・二〇を見よ
二二約一五・二〇を見よ
二三約一五・二〇を見よ
二四約一五・二〇を見よ
二五約一五・二〇を見よ
二六約一五・二〇を見よ
二七約一五・二〇を見よ
二八約一五・二〇を見よ
二九約一五・二〇を見よ
三〇約一五・二〇を見よ
三一約一五・二〇を見よ
三二約一五・二〇を見よ
三三約一五・二〇を見よ
三四約一五・二〇を見よ
三五約一五・二〇を見よ
三六約一五・二〇を見よ
三七約一五・二〇を見よ
三八約一五・二〇を見よ
三九約一五・二〇を見よ
四〇約一五・二〇を見よ
四一約一五・二〇を見よ
四二約一五・二〇を見よ
四三約一五・二〇を見よ
四四約一五・二〇を見よ
四五約一五・二〇を見よ
四六約一五・二〇を見よ
四七約一五・二〇を見よ
四八約一五・二〇を見よ
四九約一五・二〇を見よ
五〇約一五・二〇を見よ
五一約一五・二〇を見よ
五二約一五・二〇を見よ
五三約一五・二〇を見よ
五四約一五・二〇を見よ
五五約一五・二〇を見よ
五六約一五・二〇を見よ
五七約一五・二〇を見よ
五八約一五・二〇を見よ
五九約一五・二〇を見よ
六〇約一五・二〇を見よ
六一約一五・二〇を見よ
六二約一五・二〇を見よ
六三約一五・二〇を見よ
六四約一五・二〇を見よ
六五約一五・二〇を見よ
六六約一五・二〇を見よ
六七約一五・二〇を見よ
六八約一五・二〇を見よ
六九約一五・二〇を見よ
七〇約一五・二〇を見よ
七一約一五・二〇を見よ
七二約一五・二〇を見よ
七三約一五・二〇を見よ
七四約一五・二〇を見よ
七五約一五・二〇を見よ
七六約一五・二〇を見よ
七七約一五・二〇を見よ
七八約一五・二〇を見よ
七九約一五・二〇を見よ
八〇約一五・二〇を見よ
八一約一五・二〇を見よ
八二約一五・二〇を見よ
八三約一五・二〇を見よ
八四約一五・二〇を見よ
八五約一五・二〇を見よ
八六約一五・二〇を見よ
八七約一五・二〇を見よ
八八約一五・二〇を見よ
八九約一五・二〇を見よ
九〇約一五・二〇を見よ
九一約一五・二〇を見よ
九二約一五・二〇を見よ
九三約一五・二〇を見よ
九四約一五・二〇を見よ
九五約一五・二〇を見よ
九六約一五・二〇を見よ
九七約一五・二〇を見よ
九八約一五・二〇を見よ
九九約一五・二〇を見よ
一〇〇約一五・二〇を見よ

一 羅四・一六（哥前五） 哥前三・一六、六・二 キ哥後二・一七を見よ 一五
 二 加五・九（何七・四） 彼前一・一九 彼後六・二四 弗五 七・二四（哥前一〇）
 三 太一六・六、一・二 哥四一・二九、一三 哥前一〇・二七 一九・二〇
 四 羅六・一六を見よ 七 申一六・三 彼後三・六（徒一） 工彼後三・六
 五 可四・一一を見よ 二二・二二、二三、二七
 六 哥前五・三一五、六・一四 六・一四 八 哥前一・二〇を見よ
 七 哥前五・二申一三 哥前一五・三四 提前五・八
 八 太一九・二八を見よ 一 羅六・一六を見よ 二 哥前一五・三四 提前五・八
 九 太一九・二八を見よ 一 羅六・一六を見よ 二 哥前一五・三四 提前五・八
 一〇 太一九・二八を見よ 一 羅六・一六を見よ 二 哥前一五・三四 提前五・八

七六 なり。六 汝らの誇は善からず、少しのパン種の、粉の團塊をみな膨れしむるを知らぬか。七 なんぢら新しき團塊とならんために舊きパン種を取り除け、汝らはパン種なき者なればなり。夫われらの過越の羔羊、即ちキリスト既に屠られ給へり、八 されば我らは舊きパン種を用ひず、また悪と邪曲とのパン種を用ひず、眞實と眞との種なしパンを用ひて祭を行ふべし。

一九 九 われ前の書にて淫行の者と交るなと書き贈りしは、一〇 此の世の淫行の者、または貪欲のもの、奪ふ者、または偶像を拜む者と更に交るなと言ふにあらず（もし然せば世を離れざるを得ず）二 ただ兄弟と稱ふる者の中に或は淫行のもの或は貪欲のもの或は偶像を拜む者、あるひは罵るもの或は酒に酔ふもの或は奪ふ者あらば、斯る人と交ることなく、共に食する事だにすなどの意なり。三 外の者を審くことは我の干る所ならんや、汝らの審くは、ただ内の者ならずや。一三 外にある者は神これを審き給ふ、かの悪しき者を汝らの中より退けよ。

第六章

一 汝等のうち互に事あるとき、之を聖徒の前に訴へずして正しからぬ者の前に訴ふることを敢てする者あらんや。二 汝ら知らぬか、聖徒は世を審くべき者なるを。世もし汝らに審かれんには、汝ら最小き事を審くに足らぬ者ならんや。三 なんぢら知らぬか、我らは御使を審くべき者なるを、況てこの世の事をや。四 然るに汝ら審くべき此の世の事のあるとき、教會にて輕しむる所の者を審判の座に坐らしむるか。五 わが斯く言ふは汝らを辱しめんとてなり。汝等のうちに兄弟の間のことを審き得る智きもの一人だになく、六 兄弟は兄弟を、而も不信者の前に訴ふるか。七 互に相訴ふるは既に當しく汝らの失態なり。何ゆゑ寧ろ不義を受けぬ

九八 か、何ゆゑ寧ろ欺かれぬか。ハ然るに汝ら不義をなし、詐欺をなし、兄弟にも之を爲す。九 汝ら知らぬか、正し
 からぬ者の神の國を嗣ぐことなきを。自ら欺くな、淫行のもの、偶像を拜むもの、姦淫をなすもの、男娼となる
 一〇 もの、男色を行ふ者、一〇 盜するもの、貪欲のもの、酒に酔ふもの、罵るもの、奪ふ者などは、みな神の國を嗣ぐ
 二 ことなきなり。二 汝等のうち曩には斯のごとき者ありしかど、主イエス・キリストの名により、我らの神の御靈
 によりて、己を洗ひ、かつ潔められ、かつ義とせらるることを得たり。
 三 一切のもの我に可からざるなし、然れど一切のもの益あるにあらず。一切のもの我に可からざるなし、然
 れど我は何物にも支配せられず。三 食物は腹のため、腹は食物のためなり。然れど神は之をも彼をも亡し給はん。
 四 身は淫行をなさん爲にあらず、主の爲なり、主はまた身の爲なり。四 神は既に主を甦へらせ給へり、又その能力
 五 をもて我等をも甦へらせ給はん。五 汝らの身はキリストの肢體なるを知らぬか、然らばキリストの肢體をとりて
 六 遊女の肢體となすべきか、決して然すべからず。六 遊女につく者は彼と一つ體となることを知らぬか。二人の
 八七 もの一體となるべし』と言ひ給へり。七 主につく者は之と一つ體となるなり。八 淫行を避けよ、人のをかす罪は
 九 みな身の外にあり、されど淫行をなす者は己が身を犯すなり。九 汝らの身はその内にある、神より受けたる聖靈
 二〇 の宮にして汝らは己の者にあらざるを知らぬか。三〇 汝らは價をもて買はれたる者なり、然らばその身をもて
 神の榮光を顯せ。

イ(撒前四・六) (路二・八) 約壹 へ(哥前五・一) 一二(哥前一・三〇) レ徒二・二四を見よ ラ(哥前六・一五、一九) 非(哥前六・九) 哥後一 ヤ(哥前六・一六) 九
 ロ(哥前六・三、一五) 三・七) ト(哥前六・九を見よ) ル(羅八・三〇) ソ(哥前一・五、二三) ム(創二・二四、太一九) 二・二二 弗五・三 一三
 ハ(哥前六・一〇、一五) 五〇 加五・二一 五〇 加五・一九 二・三 西三・五一 ワ(太一五・一七) ツ(羅一二・五、哥前六) 五・三一 來一三・四 哥後一
 弗五・五 (徒二〇) 一・二二 弗五・五 七 多三・三 カ(西二・二二) ウ(約一七・二一—二三) ノ(約三・二二) オ(哥前三・一六を見よ) 一八、一九 後三
 三二) 提前二・一〇 來一 二 徒二二・一六を見よ ヨ(哥前六・一五、一九) 弗五・三〇 羅八・九—一 加 一 一八、一九 後三
 二(哥前一五・三三) 加 三・四 黙二二・一八、 又(哥前一・二) 約三・二 夕(加五・二四、弗五) ネ(哥前六・九、一六) ク(羅一四・七、八を見よ) ケ(羅一二・一六を見よ) 一五) (聯二・二〇)
 六・七 雅一・一六 二二・一五 又(哥前一・二) 約三・二 夕(加五・二四、弗五) ネ(哥前六・九、一六) ク(羅一四・七、八を見よ) ケ(羅一二・一六を見よ) 一五)

フ 哥前七・八、二六 五 亞二・二二 哥後八・八 (哥前七
 コ 撒前四・四 一四) 一〇) 羅二・六を見よ 可一〇・二二、二二 せ (羅一四・一九)
 エ (出二一・一〇) ア 太四・一〇を見よ キ 哥前七・八 (哥前九 路一六・一八)
 テ (出二九・一五 母前 (撒前三・五) 二二) エ 哥前七・六を見よ ヒ 哥前七・六を見よ
 二一・四、五 傳三、 サ 哥前七・二二、二五 ユ 哥前二・四、一 一 (馬二・一六 太五、 (哥後一・一七)
 五) ム 哥前七・七 (哥前九 三二、一九、三一、九 三、喇九・二、馬二・二五

第七章

一 汝らが我に書きおくりし事に就きては、男の女に觸れぬを善しとす。ニ 然れど淫行を免れんため
 に、男はおのおの其の妻をもち、女はおのおの其の夫を有つべし。三 夫はその分を妻に盡し、妻も
 また夫に然すべし。四 妻は己が身を支配する權をもたず、之をもつ者は夫なり。斯のごとく夫も己が身を支配す
 る權を有たず、之を有つ者は妻なり。五 相共に拒むな、ただ祈に身を委ぬるため合意にて暫く相別れ、後また偕
 になるは善し。これ汝らが情の禁じがたきに乗じてサタンの誘ふことなからん爲なり。六 されど我が斯くいふは
 命するにあらず、許すなり。七 わが欲する所は、すべての人の我が如くならん事なり。然れど神より各自おのが
 賜物を受く、此は此のごとく、彼は彼のごとし。

九八 ハ 我は婚姻せぬ者および寡婦に言ふ。もし我が如くにして居らば彼等のために善し。九 もし自ら制すること
 能はずば、婚姻すべし、婚姻するは胸の燃ゆるよりも勝ればなり。一〇 われ婚姻したる者に命す (命する者は我に
 一 ならず主なり) 妻は夫と別るべからず。二 もし別るる事あらば、嫁がずして居るか、又は夫と和げ。夫もまた
 妻を去るべからず。三 その外の人に我いふ (主の言ひ給ふにあらず) もし或る兄弟に不信者なる妻ありて偕に居
 二 三 ることを可しとせば、之を去るな。一三 また女に不信者なる夫ありて偕に居ることを可しとせば、夫を去るな。一四
 一五 そは不信者なる夫は妻によりて潔くなり、不信者なる妻は夫によりて潔くなりたればなり。然なくば汝らの子供
 一六 は潔からず、然れど今は潔き者なり。一五 不信者みづから離れ去らば、その離るるに任せよ。斯のごとき事あら
 ば、兄弟または姉妹、もはや繋がるる所なし。神の汝らを召し給へるは平和を得させん爲なり。一六 妻よ、汝いか

一七 夫を救ひ得るや否やを知らん。夫よ、汝いかで妻を救ひ得るや否やを知らん。一七 唯おのおの主の分ち賜ふところ、神の召し給ふところに循ひて歩むべし。凡ての教會に我が命ずるは斯のごとし。一八 割禮ありて召されし者あらんか、その人、割禮を廢つべからず。割禮なくして召されし者あらんか、その人、割禮を受くべからず。一九 割禮を受くるも受けぬも數ふるに足らず、ただ貴きは神の誠命を守ることなり。二〇 各人その召されし時の狀に止るべし。二一 なんぢ奴隸にて召されたるか、之を思ひ煩ふな（もし釋さるることを得ばゆるされよ）二三 召されて主にある奴隸は、主につける自主の人なり。斯のごとく自主にして召されたる者は、キリストの奴隸なり。二三 汝らは價をもて買はれたる者なり。人の奴隸となるな。二四 兄弟よ、おのおの召されし時の狀に止りて神と偕に居るべし。

二五 處女のことにつきては主の命を受けず、然れど主の憐憫によりて忠實の者となりたれば、我が意見を告ぐべし。二六 われ思ふに、目前の患難のためには、人その在るが隨にて止るぞ善き。二七 なんぢ妻に繋がるる者なるか、釋くことを求むな。妻に繋がれぬ者なるか、妻を求むな。二八 たとひ妻を娶るとも罪を犯すにはあらず。處女もし嫁ぐとも罪を犯すにあらず。然れど斯る者はその身、苦難に遭はん、我なんぢらを苦難に遭はすに忍びず。二九 兄弟よ、われ之を言はん、時は縮れり。されば此よりのち妻を有てる者は有たぬが如く、三〇 泣く者は泣かぬが如く、喜ぶ者は喜ばぬが如く、買ふ者は有たぬが如く、三世を用ふる者は用ひ盡さぬが如くすべし。此の世の狀態は過行くべければなり。三一 わが欲する所は汝らが思ひ煩はざらん事なり。婚姻せぬ者は如何して主を喜ばせん

一彼前三・一、二 羅一
 一・一四を見よ
 六 加一・二二 撒
 へ加五・六、六・一五
 前二・二四 撒後一
 西三・二一 羅二・
 二六―二九 加三・
 後八・一八、一一、二 哥前四・一七
 二八 徒一五・二を見よ
 二八 哥前二・一
 二八 哥前二・二五
 二八 哥前二・一六
 二八 哥前七・四〇 哥後
 二八 羅一三・一、二、二
 二八 羅一三・一〇 彼前
 二八 詩三九・六 約登二
 二八 一七來一・二、二七
 二八 羅一・一〇 彼前
 二八 二二四
 二八 太六・二五を見よ
 二八 提前五・五
 二八 彼前二・一六
 二八 哥前六・二〇を見よ
 二八 哥前七・二〇
 二八 哥前七・二〇
 二八 哥前七・六を見よ
 二八 路二一・二三 撒前
 二八 哥前九・二八
 二八 哥前七・二九を見よ
 二八 太六・二五を見よ
 二八 提前五・五

ウ(提前五・五) ヤ(哥前七・二五 哥後 八・一〇、一〇・一) テ(哥前一三・九、一二) 後二・二九 加四・九 ヌ(哥前一〇・一九 徒 羅三・三〇) モ(哥前一・二 弗四・五)
 井(提二二・二五) 八・一〇 五(哥前八・七) 提前六・四(哥前一) (耶一・五 約四・一) 一四・一五を見よ ミ(提後二・四) 提前二・五
 ノ(來一三・四) マ(哥前八・四、七、一〇) フ(哥前四・六を見よ) 三・八、九) 七(羅八・二九、一) 加四・八 シ(馬二・一〇 弗四・六) (約一三・一三)
 オ(羅七・二) (徒一五・二〇) コ(羅一四・一九を見よ) ア(雅一・一二) 一・一二) ヲ(哥前八・六 申四・) エ(哥前八・四を見よ) ヒ(羅一一・三六を見よ)
 ク(哥後六・一四) ケ(羅一五・一四 哥前 二(哥前三・一八を見よ) サ(哥前一三・一二 提 一(哥前八・二を見よ) 三五、三九、六、四) ト(羅一一・三六を見よ)

三三 三二 三三
 と主のことを慮ばかり、婚姻せし者は如何して妻を喜ばせんと世のことを慮ばかりて心を分つなり。三四 婚姻せぬ女と處女とは身も靈も潔くならんために主のことを慮ばかり、婚姻せし者は如何してその夫を喜ばせんと世のことを慮ばかりなり。三五 わが之を言ふは汝らを益せん爲にして汝らに絆を置かんとするにあらず、寧ろ汝らを宜しきに適はせ、餘念なく只管、主に事へしめんとなり。三六 人もし處女たる己が娘に對すること宜しきに適はずと思ひ、年の頃もまた過ぎんとし、かつ然せざるを得ずば、心のままに行ふべし。これ罪を犯すにあらず、婚姻せさすべし。三七 されど人もし其の心を堅くし、止むを得ざる事もなく、又おのが心の隨になすを得て、その娘を留め置かんと心のうちに定めたらば、然するは善きなり。三八 されば其の娘を嫁がする者の行爲は善し。されど之を嫁がせぬ者の行爲は更に善し。三九 妻は夫の生ける間は繋がるなり。然れど夫もし死なば、欲するままに嫁ぐ自由を得べし、ただ主にある者にのみ適くべし。四〇 然れど我が意見にては、その儘に止らば殊に幸福なり。我もまた神の御靈に感じたりと思ふ。

第八章

一 偶像の供物に就きては我等みな知識あることを知る。知識は人を誇らしめ、愛は徳を建つ。二もし人みづから知れりと思はば、知るべき程の事をも知らぬなり。三 然れど人もし神を愛せば、その人、神に知られたるなり。四 偶像の供物を食ふことに就きては、我ら偶像の世になき者なるを知り、また唯一の神の外には神なきを知る。五 神と稱ふるもの、或は天に或は地にありて、多くの神、おほくの主あるが如くなれど、我らには父なる唯一の神あるのみ、萬物これより出で、我らも亦これに歸す。また唯一の主イエス・キリ

七 ストあるのみ、萬物これに由り、我らも亦これに由れり。七 然れど人みな此の知識あるにあらず、或人は今もなほ偶像に慣れ、偶像の獣物として食する故に、その良心、弱くして汚さるるなり。八 我らを神の前に立たしむるものは食物にあらず。されば食するも益なく、食せざるも損なし。九 然れど心して汝らの有てる此の自由を弱者の躓物とすな。一〇 人もし知識ある汝が偶像の宮にて食事するを見んに、その人弱きときは良心そそのかされて偶像の獣物を食せざらんや。一一 然らばキリストの代りて死に給ひし弱き兄弟は、汝の知識によりて亡ぶべし。一二 斯のこたく汝ら兄弟に對して罪を犯し、その弱き良心を傷めしむるは、キリストに對して罪を犯すなり。一三 この故に、もし食物わが兄弟を躓かせんには、兄弟を躓かせぬ爲に、我は何時までも肉を食はじ。

第九章

一 我は自主の者ならずや、使徒にあらずや、我らの主イエスを見しにあらずや、汝らは主に在りて我が業ならずや。二 われ他の人には使徒ならずとも汝らには使徒なり。汝らは主にありて我が使徒たる職の印なればなり。三 われを審く者に對する我が辯明は斯のごとし。四 我らは飲食する權なきか。五 我らは他の使徒たち、主の兄弟たち及びケバのごとく姉妹たる妻を携ふる權なきか。六 ただ我とバルナバとのみ工を止むる權なきか。七 誰か己の財にて兵卒を務むる者あらんや。誰か葡萄畑を作りてその果を食はぬ者あらんや。誰か群を牧ひてその乳を飲まぬ者あらんや。八 我ただ人の思にのみ由りて此等のことを言はんや、律法も亦かく言ふにあらずや。九 モーセの律法に「穀物を碾す牛には口籠を繫くべからず」と録したり。神は牛のために慮はか

イ約一・三四一・一六 哥前八・四一六 五・一三 西二・八を
ハ羅一四・一四・一二、見よ
二 哥前八・一〇—一二 羅一四・一を
水羅一四・一七 チ 哥前八・四一六
ヘ羅一四・一三、二一 リ 哥前八・一を見よ

イ約一・三四一・一六 哥前一〇・二八 加 又（羅一四・一五、二
五・一三 西二・八を
ハ羅一四・一四・一二、見よ
二 哥前八・一〇—一二 羅一四・一を
水羅一四・一七 チ 哥前八・四一六
ヘ羅一四・一三、二一 リ 哥前八・一を見よ

ル羅一四・二〇
（太一八・六）
テ（太二五・四五）
ワ羅一四・二一（哥前
一〇・三一 哥後六
三、一一・二九）
カ 哥前九・一九（哥前
一〇・二九）
ヨ 徒一四・一四 哥後
一・二、二二 撒前二
六 提前二・七 提
後一・一一 及び羅
ソ（徒一・二五）

ツ約三・三三を見よ
（哥後三・二、三）
ウ 徒四・三六を見よ
二・六、九 撒後三・
八、九
ナ太一二・四六を見よ
ラ太八・一四 約一・
ノ申二〇・六 撒二七

二八（哥前三・六、
八）
オ羅三・五を見よ
ク申二五・四 提前五
一・一八 提後二・
二八
ヤ申三二・一—四 撒
一・二〇

一四四・二二二、二四を (徒二〇・三三) 哥前六・一九 九・二太一〇・二〇 路一
 見よ エ 哥前四・一五を見よ 二四 〇・七 提前五・一八 エ 哥前四・一 四一・ 二二二一六 羅一
 ケ (提後二・六) 哥後二・一二を見よ キ利六・一六、二六、 哥前九・四を見よ 二五(加二・七 弗 太一八・一五 彼前 加二・一九
 フ (羅一五・二七 哥前 一三) 七・六、三一等 民五 路一〇・八 三・二、三 腓一・一 三・二
 九・四) 九・一〇、一八・八 ミ 哥後一・一〇 六) イ 哥後四・五 (加五・ 太(羅八・二二 哥前七・
 コ 哥前九・一五、一八 ア 哥前一三・七 一三) 哥前九・一八 約四 ヒ 哥後二・七、一二 一三(徒一八・三) ロ (徒一六・三、二二・
 徒一八・三を見よ サ 羅六・一六を見よ 八・一 三六 哥前三・八を 一三(徒一八・三) 一三(徒一六・三、二二・ 一二五、二・二二)

一〇 り給へるか、一〇また専ら我等のために之を言ひ給ひしか、然り我らのために録されたり。それ耕す者は望をもて
 二 耕し、穀物をこなす者は之に與る望をもて碾すべきなり。二もし我ら靈の物を汝らに蒔きしならば、汝らの肉の
 三 物を刈り取るは過分ならんや。三もし他の人なんぢらに對してこの權あらんには、況て我らをや。然れど我等は
 四 この權を用ひざりき。唯キリストの福音に障得なきやうに一切のことを忍ぶなり。三なんぢら知らぬか、聖なる
 五 事を務むる者は宮のものを食し、祭壇に事ふる者は祭壇のものに與るを。四斯のごとく主もまた福音を宣傳ふる
 六 者の福音によりて生活すべきことを定め給へり。五されど我は此等のことを一つだに用ひし事なし、また自ら斯
 七 く爲られんために之を書き贈るにあらず、斯くせられんよりは寧ろ死ぬるを善しとすればなり。誰もわが誇を空
 八 しく爲ざるべし。一六 われ福音を宣傳ふとも誇るべき所なし、已むを得ざるなり。もし福音を宣傳へずば、我は
 九 禍害なるかな。一七 若しわれ心より之をなさば報を得ん、たとひ心ならずとも我はその務を委ねられたり。一八 然
 一〇 らば我が報は何ぞ、福音を宣傳ふるに、人をして費なく福音を得しめ、而も福音によりて我が有てる權を用ひ盡
 一〇 さぬこと是なり。一九 われ凡ての人に對して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷と
 二〇 なれり。二〇 我ユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり、これユダヤ人を得んが爲なり。律法の下にある者には
 二一 律法の下に我はあらねど——律法の下にある者の如くなれり。これ律法の下にある者を得んが爲なり。二二 律法な
 二二 き者には——われ神に向ひて律法なきにあらず、反つてキリストの律法の下にあれど——律法なき者の如くなれ

三三、これ律法なき者を得んがためなり。三三、弱き者には弱き者となれり、これ弱き者を得んためなり。我すべての人には凡ての人の状に従へり、これ如何もして幾許かの人を救はんためなり。三三、われ福音のために凡ての事をなす、これ我も共に福音に與らん爲なり。三四、なんぢら知らぬか、馳場を走る者はみな走れども、褒美を得る者の、ただ一人なるを。汝らも得んために斯く走れ。三五、すべて勝を争ふ者は何事をも節し慎む、彼らは朽つる冠冕を得んが爲なれど、我らは朽ちぬ冠冕を得んがために之をなすなり。三六、斯く我が走るは目標なきが如きにあらず、我が拳闘するは空を撃つが如きにあらず。三七、わが體を打擲きて之を服従せしむ。恐らくは他人に宣傳へて自ら棄てらるる事あらん。

第一〇章

一、兄弟よ、我なんぢらが之を知らぬを好まず。即ち我らの先祖はみな雲の下にあり、みな海をとほり、ニみな雲と海とにてバプテスマを受けてモーセにつけり。三、而して皆おなじく靈なる食物を食し、四、みな同じく靈なる飲物を飲めり。これ彼らに隨ひし靈なる岩より飲みたるなり、その岩は即ちキリストなりき。五、然れど彼らのうち多くは神の御意に適はず、荒野にて亡されたり。六、此等のことは我らの鑑にして、彼らが貪りし如く惡を貪らざらん爲なり。七、彼らの中の或者に效ひて偶像を拜する者となるな、即ち「民は坐して飲食し立ちて戯る」と録されたり。八、又かれらの中の或者に效ひて我ら姦淫すべからず、姦淫を行ひしもの一日に二萬三千人死にたり。九、また彼等のうちの或者に效ひて我ら主を試むべからず、主を試みしもの、蛇に亡され

イ 羅一四・一を見よ
 哥後二・二九
 哥前一〇・三三
 八 羅一一・一四を見よ
 二 哥前九・一三を見よ
 水 腓三・二四 西二・
 一八
 へ 來二・二一 (提後四
 七 徒二〇・二四)
 加二・二を見よ
 提前六・一二 提後
 二・五、四・七
 (弗六・一二)
 提後四・八 雅一・
 一二 彼前五・四
 羅二・一〇、三・一
 詩六六・六
 一 (提後二・五)
 リ (哥前二四・九)
 又 (羅八・一二)
 ル 羅一・一三を見よ
 ヲ 出三一・三一 詩一
 〇五・三九
 一 出四・二二、二九
 詩六六・六
 カ (羅六・三 哥前一・
 一三 加三・二七)
 三 出二六・四、一五、三
 五 申八・三 尼九
 一五、二〇 詩七
 八・二四、二五 約六
 三・一
 夕 出二七・六 民二〇
 一 詩七八・一五
 一 (來二・二六)
 三 民一四・二九、三二、
 三五、三七、二六・
 六五 來三・一七
 二・一
 一 出三三・二六
 三 出三三・一九
 一 民二五・一以下
 一〇六・二四
 一 出三三・四 哥前五
 一 一を見よ 哥前
 一〇・一四 約壹五
 一 (民二五・九)
 一 民二一・五
 一 民二一・六
 一 民一六・四一、一七
 一 五、一〇 猶一六
 一 出二二・二三 母後
 二四・一六 代上二
 一・二五 (來二・
 二八)
 一 民一六・四九
 一 哥前一〇・六
 一 羅一三・一一を見よ
 一 羅四・二三を見よ
 一 羅一一・二〇を見よ
 一 (彼後三・一七)

テ 哥前一・九を見よ 一〇・一九、二〇
ア (後後二・九) ユ 太二六・二七、二八 二・四二を見よ シ 羅一・三
サ 來六・九を見よ 哥前一・二五 三・二二、二五、二七、二八 工 利七・六、一四、一五 申 申三三・二二
キ 哥前一・七を見よ 太二六・二六 哥前一 弗四・四、一六、西三 (來一三・一〇) セ (哥後六・一六) 九 口 傳六・一〇 察四五 哥前一〇・三三、一
約 卷五・二二 (哥前一 一・二三、二四 徒 一・一五) と 哥前八・四を見よ ス (察六五・一一) 二 羅一四・一九を見よ へ (徒一〇・二五 哥前 八・七)

たり。二〇 又かれらの中の或者に效ひて呔くな、呔きしもの、亡す者に亡されたり、二 彼らが遭へる此等のことは

鑑となれり、かつ末の世に遭へる我らの訓戒のために録されたり。三 然らば自ら立てりと思ふ者は倒れぬやうに

心せよ。二三 汝らが遭ひし試験は人の常ならぬはなし。神は眞實なれば、汝らを耐へ忍ぶこと能はぬほどの試験に

遭はせ給はず。汝らが試験を耐へ忍ぶことを得んために、之と共に遁るべき道を備へ給はん。

二四 さらば我が愛する者よ、偶像を拜することを避けよ。二五 われ慧き者に言ふごとく言はん、我が言ふところ

を判断せよ。二六 我らが祝ふところの祝の酒杯は、これキリストの血に與るにあらずや、我らが擘く所のパンは、

これキリストの體に與るにあらずや。二七 パンは一つなれば、多くの我らも一體なり、皆ともに一つのパンに與る

に因る。二八 肉によるイスラエルを視よ、供物を食ふ者は祭壇に與るにあらずや。二九 然らば我が言ふところは何

ぞ、偶像の供物はあるものと言ふか、また偶像はあるものと言ふか。三〇 否われは言ふ、異邦人の供ふる物は神に

供ふるにあらず、惡鬼に供ふるなりと。我なんぢらが惡鬼と交るを欲せず。三一 なんぢら主の酒杯と惡鬼の酒杯と

を兼飲むこと能はず。主の食卓と惡鬼の食卓とに兼與ること能はず。三二 われら主の妬を惹起さんとするか、我ら

は主よりも強き者ならんや。

三三 一切のもの可からざるなし、然れど一切のもの益あるにあらず。一切のもの可からざるなし、然れど一切

のもの徳を建つるにあらず。三四 各人おのが益を求むることなく、人の益を求めよ。三五 すべて市場にて賣る物は

良心のために何をも問はずして食せよ。三六 そは地と之に満つる物とは主の物なればなり。三七 もし不信者に招かれ

コリント前書 一〇・一〇—二七

三四七

二八 て往かんとせば、凡て汝らの前に置く物を良心のために何も問はずして食せよ。二八人もし此は犠牲にせし肉なりと言はば告げし者のため、また良心のために食すな。二九良心とは汝の良心にあらず、かの人の良心を言ふなり。何ぞわが自由を他の人の良心によりて審かるる事をせん。三〇もし感謝して食する事をせば、何ぞわが感謝する所のものに就きて譏らるる事をせん。三一さらば食ふにも飲むにも何事をなすにも、凡て神の榮光を顯すやうに爲よ。三二ユダヤ人にもギリシヤ人にも、また神の教會にも贖物となるな。三三我も凡ての事を、すべての人の心に適ふやうに力め、人々の救はれんために、己の益を求めずして多くの人の益を求むるなり。

第一章

一 我がキリストに效ふ者なる如く、なんぢら我に效ふ者となれ。

二 汝らは凡ての事につきて我を憶え、且わが傳へし所をそのまま守るに因りて、我なんぢらを譽む。三されど我なんぢらが之を知らんことを願ふ。凡ての男の頭はキリストなり、女の頭は男なり、キリストの頭は神なり。四すべて男は祈をなし預言をなすとき、頭に物を被るは、其の頭を辱しむるなり。五すべて女は祈をなし預言をなすとき、頭に物を被らぬは、其の頭を辱しむるなり。これ薙髪と異なる事なし。六女もし物を被らずば、髪をも剪るべし。然れど髪を剪り、或は薙ることを女の恥とせば物を被るべし。七男は神の像、神の榮光なれば、頭に物を被るべきにあらず、然れど女は男の光榮なり。八男は女より出でずして、女は男より出で、九男は女のために造られずして、女は男のために造られたればなり。一〇この故に女は御使たちの故によりて

- イ(路一〇・八) 一・二一 (哥前七・二七 腓三 一・一四) 三・六 (哥前一五・二 撒後 二・一五 (撒後三・レ弗五・二三 (創三・一六)
- ロ(哥前八・七、一〇—ト徒三〇・二八 哥前 一・二二、一一・二二) 六 (哥前八・二三を見よ) 一・二二 五、五・二三 西一 本路二・三六 徒二一 九 (哥前一四・三 ウ創二・一八 井(太一八・一〇 路一
- ハ(哥前九・一九を見よ) 一五・九 哥後一・一 (徒二四・二六) 一・二二 二 (哥前一二・二七、二) 二 (哥前一三・二三を見よ) ナ(申二二・一二)
- ニ(羅一四・六を見よ) 加一・一三 撒前二 一・二二 (加一・一〇) 二 (哥前四・一六を見よ) ヲ(申二二・二六、五・一、 九・六 雅三・九
- ホ(羅一四・一六) 二・二四 撒後一・四 二・二二 (加一・一〇) 二 (哥前四・一七 撒前 二・一三、一三、一四、一五) ヲ(申二二・二三
- ヘ(西三・二七 撒前四 提前三・五、一五) 又撒前二・一六 (羅一 二・一三、一四、一五) 夕弗一・二三、 四・一 撒前五・二〇

ノ加三・二八
 才羅一・三六を見よ
 ク哥後五・一八
 ヤ提前六・四
 マ(哥前九・二一三、
 一・一六及び四・五)
 一(約登二・一九申一
 三・三三)
 テ(太一八・七路一七
 一・徒二〇・三〇
 サ哥前一〇・三三を見
 ム哥前一五・三(加一
 一・二二 西三・二四)
 シ哥前一〇・一六を見
 モ(約一三・二七)
 セ約六・五一(約六
 五三・一五六)
 ス(來一〇・二九)
 イ哥後一三・五(加六
 四(太二六・二二

頭かしらに權けんの徽しるしを戴いたくべきなり。二二されど主しゆに在ありては、女をんなは男をとこに由よらざるなく、男をとこは女をんなに由よらざるなし。三三女の男

より出いでしごとく、男をとこは女をんなによりて出いづ。而しかして萬物ばんぶつはみな神かみより出いづるなり。四四汝等なんぢらみづから判はん斷だんせよ、女をんなの

物ものを被からずして神かみに祈いのるは宜よろしき事ことなるか。五五なんぢら自然しぜんに知しるにあらずや、男をとこもし長ながき髪かみの毛けあらば、恥はづ

べきことにして、六六女をんなもし長ながき髪かみの毛けあらば、その光榮くわうえいなるを。それ女をんなの髪かみの毛けは、被物かぶりものとして賜たまはりたるな

り。七七假令たとひこれを抗辯あらがふ者ものありとも斯かくのごとき例れいは我われらにも神かみの諸教しよけう會くわいにもある事ことなし。

八八我われこれらことの事ことを命めいじて汝なんぢらを譽ほめず。汝なんぢらの集あつまること、益えきを受けずして損そんを招まねげばなり。九九先まづ汝なんぢらが教

會くわいに集あつまることとき分争あらしありと聞きく、われ暑ほぼこれことを信しんず。一〇一〇それは汝等なんぢらのうちうちに是ぜとせらるべき者ものの現あらはれんため

に黨派かたうも必かならず起おこるべければなり。一一一一なんぢら一處ひとつところに集あつまることとき主しゆの晚餐ばんさんを食しすること能あたはず。一二一二食しする時とき、おのお

のひとに先まだちて己おのれの晚餐ばんさんを食しすることにより、饑ううる者ものあり、醉飽さひあける者ものあればなり。一三一三汝なんぢら飲のみ食くひすべき家いへなきか、

神かみの教けう會くわいを輕かろんじ、また乏とちしき者ものを辱はづかすか、我われなにを言いふべきか、汝なんぢらを譽ほむべきか、之これに就つきては

譽ほめぬなり。一四一四わが汝なんぢらに傳つたへしことは主しゆより授まげられたるなり。即すなはち主しゆイエス付わたされ給たまふ夜よ、パンパンを取とり、一五一五夕餐ゆふけのち

祝しして之これを擘きき、而しかして言いひ給たまふ『これは汝等なんぢらのためための我われが體からだなり。我われが記き念ねんとして之これを行おこなへ』一六一六夕餐ゆふけのち

酒杯さかづきをも前まの如ごとくして言いひたまふ『この酒杯さかづきは我われが血ちによれる新あたらしき契けい約やくなり。飲のむことに我われが記き念ねんとして之これを

おこなへ』一七一七汝等なんぢらこのパンパンを食しし、この酒杯さかづきを飲のむことに、主しゆの死しを示しめして其その來きたりたまふ時ときにまで及およぶなり。

一八一八然しかれば宜よろしきに適かなはずして主しゆのパンパンを食しし、主しゆの酒杯さかづきを飲のむ者ものは、主しゆの體からだと血ちとを犯まかすなり。一九一九人ひとみづから省かへ。

二九 みて後、そのパンを食し、その酒杯を飲むべし。二九 御體を辨へずして飲食する者は、その飲食によりて自ら審判を招くべければなり。三〇 この故に汝等のうちに弱きもの、病めるもの多くあり、また眠に就きたる者も少からず。三一 我等もし自ら己を辨へなば審かるる事なからん。三二 されど審かるる事のあるは、我らを世の人とともに罪に定めじとて主の懲しめ給ふなり。三三 この故に、わが兄弟よ、食せんとて集るときは互に待ち合せよ。三四 もし飢うる者あらば、汝らの集會の審判を招くこと無からん爲に己が家にて食すべし。三五 その他のことは我いたらん時これを定めん。

第二章

一 兄弟よ、靈の賜物に就きては、我なんぢらが知らぬを好まず。二 なんぢら異邦人なりしとき、誘はるるままに物を言はぬ偶像のもとに導き往かれしは、汝らの知る所なり。三 然れば我なんぢらに示さん、神の御靈に感じて語る者は、誰も『イエスは詛はるべき者なり』と言はず、また聖靈に感ぜざれば、誰も『イエスは主なり』と言ふ能はず。四 賜物は殊なれども、御靈は同じ。五 務は殊なれども、主は同じ。六 活動は殊なれども、凡ての人のうちに凡ての活動を爲したまふ神は同じ。七 御靈の顯現をおのおのに賜ひたるは、益を得させんためなり。八 或人は御靈によりて智慧の言を賜はり、或人は同じ御靈によりて知識の言、九 或人は同じ御靈によりて信仰、ある人は一つ御靈によりて病を醫す賜物、一〇 或人は異能ある業、ある人は預言、ある人は靈を辨へ、或人は異言を言ひ、或人は異言を釋く能力を賜はる。二 凡て此等のことは同じ一つの御靈の活動にし

イ 徒七・六〇を見よ
 ロ 約壹一・九
 ハ 哥前二・二〇
 ニ 母後七・一四 轉九
 四・二二 來二二
 七・一〇 黙三・二
 九 (提前二・二〇)
 水 哥前二・二二
 ヘ 哥前一・二二
 ト 哥前四・一九を見よ
 チ 哥前七・二七、一六
 一・多一・五
 (哥前四・一七)
 リ 哥前四・一 (哥前
 一一・四)
 又 羅一・二三を見よ
 ル 哥前六・二一を見よ
 弗二・一一、一二
 (彼前四・三)
 ヲ 詩一一五・五 耶一
 〇・五 哈三・一八、
 一九 (賽四六・七)
 ワ (提前二・九)
 カ 約壹四・二 (太三・
 三)
 ツ 羅一二・七を見よ
 四三 默一・一〇等)
 ヨ 羅九・三を見よ
 タ 同節御靈の引照を
 見よ
 レ 約一三・一三を見よ
 羅一〇・九
 ソ 羅一二・六を見よ
 ツ 羅一二・七を見よ
 (哥前一・二一 弗
 四・四、一一 來二・
 四)
 ナ (哥前一・五・二八 弗
 一・二三、四・六)
 ナ (哥前一・二・二二
 三〇、一四・二六
 弗四・二二、一五)
 ラ 哥前二・六 (哥後一
 一・二)
 ム 哥前一四・六
 (羅一五・二四 哥前
 二・二一、一六 哥後
 二・二四、四・六、
 八・七、一一・六)
 オ (哥前一・四、一
 三・二、八)
 ク (哥前一四・二九 約
 四・一三)
 井 哥前一二・二八、三
 ヤ 哥前一二・二八、三
 オ、一三・一、一四
 二以下 (可一六・
 一七)
 マ 哥前一三・三〇、一
 四・五、二六

ケ 哥前二二・一八
 フ 哥前二二・四、八一
 ア (弗二・一八) 一三・六
 サ (約七・三七—三九) ミ 哥前二二・二二を見
 一〇 來二・四
 テ 加三・二八 西三・キ 哥前二二・二〇
 よ 哥前二二・二四
 コ 羅一・二・四を見よ
 一一 (弗二・一三—一四) ユ 哥前二二・二一
 シ 哥前二二・二二
 哥前一〇・一七を見
 一八 羅三・二二
 メ 哥前二二・二八 (羅一・二・二) 弗一・五を見よ
 二二、四・二二、五 ヒ 弗二・二〇、三・五、セ 徒一三・二二を見よ
 三〇 西一・二八、四・二一
 二四、二・二九 千 弗二・二〇、三・五、九
 二 哥前二〇・三二を見よ
 四・二一 徒一三・一
 イ 哥前二二・九、三〇
 ロ 羅一・二・八
 ホ 哥前二二・一八

て、御靈その心に隨ひて各人に分與へたまふなり。

二三 體は一つにして肢は多し、體の肢は多くとも一つの體なるが如く、キリストも亦然り。二三 我らはユダヤ

人・ギリシヤ人・奴隸・自主の別なく、一體とならん爲に、みな一つ御靈にてバプテスマを受けたり。而して

二四 みな一つ御靈を飲めり。二四 體は一肢より成らず、多くの肢より成るなり。二五 足もし「我は手にあらぬ故に體に屬

二六 せず」と云ふとも、之によりて體に屬せぬにあらず。二六 耳もし「われは眼にあらぬ故に體に屬せず」と云ふとも、

二七 之によりて體に屬せぬにあらず。二七 もし全身眼ならば、聽くところ何れか。もし全身聽く所ならば、臭ぐところ

二〇九八 何れか。「ハげに神は御意のままに、肢をおのおの體に置き給へり。一九 若しみな一肢ならば、體は何れか。二〇 げに

二一 肢は多くあれど、體は一つなり。二二 眼は手に對ひて「われ汝を要せず」と言ひ、頭は足に對ひて「われ汝を要せ

二三 ず」と言ふこと能はず。二三 否、からだの中に於て最も弱しと見ゆる肢は、反つて必要なり。二三 體のうちにて尊から

二四 ずと思はるる所に、物を纏ひて殊に之を尊ぶ。斯く我らの美しからぬ所は、一層すぐれて美しくすれども、二四 美

二五 しき所には、物を纏ふの要なし。神は劣れる所に殊に尊榮を加へて人の體を調和したまへり。二五 これ體のうちにて

二六 分争なく、肢々一致して、互に相顧みんためなり。二六 もし一つの肢苦しまば、もろもろの肢ともに苦しみ、一つ

二七 の肢尊ばれば、もろもろの肢ともに喜ぶなり。二七 乃ち汝らはキリストの體にして各自その肢なり。二八 神は第一

二九 に使徒、第二に預言者、第三に教師、その次に異能ある業、次に病を醫す賜物、補助をなす者、治むる者、異言

などを教會に置きたまへり。二九 是みな使徒ならんや、みな預言者ならんや、みな教師ならんや、みな異能ある業

三〇 を行ふ者ならんや、三〇 みな病を醫す賜物を有てる者ならんや、みな異言を語る者ならんや、みな異言を釋く者ならんや、三二 なんぢら優れたる賜物を慕へ、而して我さらに善き道を示さん。

第一三章

一 たとひ我もろもろの國人の言および御使の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く鏡の如し。
 二 假令われ預言する能力あり、又すべてのの奧義と凡ての知識とに達し、また山を移すほどの大なる

三 信仰ありとも、愛なくば數ふるに足らず。三 たとひ我わが財産をことごとく施し、又わが體を焼かるる爲に付す

四 愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、五 非禮を行はず、

六 己の利を求めず、憤ほらず、人の惡を念はず、六 不義を喜ばずして、眞理の喜ぶところを喜び、七 凡そ事忍び、

八 おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ふるなり。八 愛は長久までも絶ゆることなし。然れど預言は廢

九 異言は止み、知識もまた廢らん。九 それ我らの知るところ全からず、我らの預言も全からず、一〇 全き者の來

二 らん時は全からぬもの廢らん。二 われ童子の時は語ることも童子のごとく、思ふことも童子の如く、論ずる事も

三 童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。三 今われらは鏡をもて見るところと見るところ隴な

り。然れど、かの時には顔を對せて相見ん。今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如

く全く知るべし。三 げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。

二 第一四章 一 愛を追ひ求めよ、また靈の賜物、ことに預言する能力を慕へ。二 異言を語る者は人に語るにあら

イ 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二 一 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一〇 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一一 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一二 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一三 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一四 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一五 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一六 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一七 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一八 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一九 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二〇 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二一 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二二 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二三 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二四 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二五 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二六 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二七 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二八 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 二九 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三〇 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三一 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三二 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三三 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三四 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三五 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三六 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三七 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三八 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 三九 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四〇 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四一 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四二 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四三 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四四 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四五 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四六 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四七 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四八 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 四九 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五〇 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五一 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五二 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五三 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五四 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五五 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五六 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五七 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五八 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 五九 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六〇 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六一 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六二 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六三 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六四 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六五 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六六 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六七 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六八 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 六九 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七〇 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七一 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七二 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七三 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七四 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七五 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七六 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七七 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七八 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 七九 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八〇 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八一 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八二 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八三 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八四 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八五 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八六 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八七 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八八 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 八九 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九〇 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九一 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九二 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九三 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九四 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九五 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九六 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九七 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九八 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 九九 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二
 一〇〇 哥前一二・二〇を見よ 赤詩一五〇・五 五二

二 哥前二・三を見よ 一五 撒前二・三 ユ 哥前二四・一
 テ 哥前二四・四、五、一 (徒二・四〇、一一) メ 民一・二二九
 二、二七、二六及び (二三) ミ 哥前二・一〇
 羅一四・一九を見よ サ 哥前二四・二
 ア 徒四・三六、一三、キ 哥前二四・三を見よ エ 哥前二四・二六 弗
 一・二七
 ス (民一〇・九 賽五 徒二八・二を見よ 一〇六・四八 耶一
 八・一 耶四・一九 八・一 耶四・一九 結三三・三三六 耳 二一・二二一
 結三三・三三六 耳 二一・二二一 徒 二一・二二一 徒 二一・二二一
 二・四二 羅六・一七 イ (哥前九・二六) ホ (弗五・一九 四三、
 一六) 徒二八・二を見よ ハ 哥前二四・三を見よ 七 (七)
 太二五・三六 申二七・二五、二六 代上一・六、三六 尼 二〇
 五・二二、八、六 詩 二〇 一五、二八、六、一
 五、一四、七、一二、
 一九、四 (哥後一、
 二〇) 哥前二四・三を見よ

三 ずして神に語るなり。そは靈にて奥義を語るとも、誰も悟る者なければなり。五 されど預言する者は人に語りて
 四 其の徳を建て、勸をなし、慰安を與ふるなり。四 異言を語る者は己の徳を建て、預言する者は教會の徳を建つ。
 五 われ汝等がみな異言を語らんことを欲すれど、殊に欲するは預言せん事なり。異言を語る者、もし釋きて教會
 六 の徳を建つるにあらざば、預言する者のかた勝るなり。六 然らば兄弟よ、我もし汝らに到りて異言をかたり、或
 七 は黙示、あるひは知識、あるひは預言、あるひは教をもて語らざば、何の益かあらん。七 生命なくして聲を出す
 八 もの、或は笛、あるひは立琴、その音もし差別なくば、争で吹くところ、弾くところの何たるを知らん。ハラツパ
 九 若し定まりなき音を出さば、誰か戰鬪の備をなさん。九 斯のごとく汝らも舌をもて明かなる言を出さずば、争で
 一〇 語るところの何たるを知らん、これ汝等ただ空氣に語るのみ。一〇 世には國語の類おほかれど、一つとして意義あ
 一 ならぬはなし。二 我もし國語の意義を知らずば、語る者に對して夷人となり、語る者も我に對して夷人とならん。
 二 然らば汝らも靈の賜物を慕ふ者なれば、教會の徳を建つる目的にて賜物の豊ならん事を求めよ。三 この故に
 四 異言を語る者は自ら釋き得んことをも祈るべし。四 我もし異言をもて祈らば、我が靈は祈るなれど、我が心は果
 五 を結ばず。一五 然らば如何にすべきか、我は靈をもて祈り、また心をもて祈らん。我は靈をもて謳ひ、また心をも
 六 て謳はん。一六 汝もし然せずば靈をもて祝するとき、凡人は汝の語ること知らねば、その感謝に對し如何にして
 一七 アアメンと言はんや。一七 なんぢの感謝はよし、然れど、その人の徳を建つることなし。一八 我なんぢら衆の者より
 一九 も多く異言を語ることを神に感謝す。一九 然れど我は教會にて異言をもて一萬言を語るよりも、寧ろ人を教へん

ために我が心をもて五言を語らんことを欲するなり。

二〇 兄弟よ、智慧に於ては子供となるな。悪に於ては幼児となり、智慧に於ては成人となれ。三一 律法に録して

「主、宣給はく、他し言の民により、他し國人の口唇をもて此の民に語らん、然れど尙かれらは我に聴かじ」と

あり。三二 されば異言は、信者の爲ならで不信者のための徴なり。預言は、不信者の爲ならで信者のためなり。三三

もし全教會一處に集れる時、みな異言にて語らば、凡人または不信者いり來らんに、汝らを狂へる者と言はざ

らんや。三四 然れど若しみな預言せば、不信者または凡人の入りきたるとき、會衆のために自ら責められ、會衆の

ために是非せられ、三五 その心の秘密あらはるる故に伏して神を拜し「神は實に汝らの中に在す」と言はん。

三六 兄弟よ、さらば如何にすべきか、汝らの集る時はおのおの聖歌あり、教あり、黙示あり、異言あり、釋く

能力あり、みな徳を建てん爲にすべし。三七 もし異言を語る者あらば、二人、多くとも三人、順次に語りて一人こ

れを釋くべし。三八 もし釋く者なき時は教會にては黙し、而して己に語り、また神に語るべし。三九 預言者は二人も

しくは三人かたり、その他の者はこれを辨ふべし。四〇 もし坐しをる、他のもの黙示を蒙らば、先のもの黙すべし。

四一 汝らは皆すべての人に學ばせ、勸を受けしめんために一人一人、預言することを得べければなり。四二 また預言

者の靈は預言者に制せらる。四三 それ神は亂の神にあらず、平和の神なり。

四四 聖徒の諸教會のするごとく、女は教會にて黙すべし。彼らは語ることを許されず、律法に云へるごとく順

順に従ふべし。四五

イ 羅一・二三を見よ。ホ 哥前二・六。ル (約四・一九)。タ (哥前二・八—一。ナ 哥前二・一〇を見

口 弗四・二四。來五。ヘ 約一〇・三四を見よ。テ 路一七・二六。ワ 賽四五・一四。亞八。レ 弗五・一九。ラ 哥前二・一〇を見

ハ 羅二六・一九。ト (賽二八・一二)。二二三 (但二・四七。ソ 哥前二・一〇を見。ム 哥前二・一〇を見。ノ (哥前二・一〇) 見よ。ケ (哥前二・一〇) 見よ。太一八・三を見よ。又 哥前一三・二を見よ。ヨ 哥前一四・二五を見。ネ 哥前一三・一〇を見。ウ 哥前一四・五、一三。オ (哥前一四・四〇) フ 創三・一六。及び二二・一〇を見。ク 徒九・二三を見よ。コ 提前二・一一、一二。ヤ 哥前七・一七を見よ。セ (哥前四・一七) マ (哥前一・一、五、一三) 見よ。ケ (哥前一四・二二) フ 創三・一六。

エ(哥後一〇・七) ム(哥前三六を見よ) ス約一・二九加一・四 ハ太一六・二一を見よ
 テ(哥前二・一五を見よ) (羅二・一六) モ(哥前一一・二三) 來五・一・三 彼前 約二・二一、二二徒
 ア(哥前七・四〇 約登) ミ加一・一一 セ(賽五三・五一) 二・二四 リ(路二四・三三、三三) ナ(弗三・八) 哥後一二
 四・六) シ(羅五・二) (羅一一・一) 太二六・二四を見よ イ太二七・五七、六一 二(哥前二・二二を見よ) 六、三七 徒一・三、
 サ(哥前一三・二を見よ) 二〇 哥前一六・一 路二四・二五、二七 を見よ 詩一六・一〇、一一 へ可一六・一四 又(哥前九・一を見よ) ワ(羅一二・三を見よ)
 半(哥前一二・三一を見よ) 三 哥後一・二四 徒八・三三、三三、 徒二・三一、二六、 ト(徒七・六〇を見よ) (徒九・三三、八、二) カ(哥後二・二三、一) 二・二一 西一・二九
 ヌ(哥前一四・三三) 五加三・四 二二 二二、二三 哥前一五・一八、二 二・六一、二、二六 二・二一 西一・二九

三五 ぶべき者なり。三三 何事か學ばんとする事あらば、家にて己が夫に問ふべし、女の教會にて語るは恥づべき事なればなり。三六 神の言は汝等より出でしか、また汝等にのみ來りしか。

三七 人もし自己を預言者とし、或は御靈に感じたる者と思はば、わが汝らに書きおくる言を主の命なりと知れ。三八 もし知らずば其の知らざるに任せよ。

三九 九されば我が兄弟よ、預言することを慕ひ、また異言を語ることを禁ずな。四〇 凡ての事、宜しきに適ひ、かつ秩序を守りて行へ。

第一五章

一 兄弟よ、曩にわが傳へし福音を更に復なんぢらに示す。汝らは之を受け、之に頼りて立ちたり。二 なんぢら徒らに信ぜずして我が傳へしまを堅く守らば、この福音に由りて救はれん。三 わが第一に汝らに傳へしは、我が受けし所にして、キリスト聖書に應じて我らの罪のために死に、四 また葬られ、聖書に應じて三日めに甦へり、五 ケバに現れ、後に十二弟子に現れ給ひし事なり。六 次に五百人以上の兄弟に同時にあらはれ給へり。その中には既に眠りたる者もあれど、多くは今なほ世にあり。七 次にヤコブに現れ、次にすべて

の使徒に現れ、八 最終には月足らぬ者のごとき我にも現れ給へり。九 我は神の教會を迫害したれば、使徒と稱へらるるに足らぬ者にて使徒のうち最小者なり。一〇 然るに我が今の如くなるは、神の恩恵に由るなり。斯てその賜はりし御恵は空しくならずして、凡ての使徒よりも我は多く働けり。これ我にあらず、我と偕にある神の恩恵

二 なり。二されば我にもせよ、彼等にもせよ、宣傳ふる所は斯の如くにして、汝らは斯のごとく信じたるなり。

三 三キリストは死人の中より甦へり給へりと宣傳ふるに、汝等のうちに、死人の復活なしと云ふ者のあるは何

四 ぞや。三もし死人の復活なくば、キリストもまた甦へり給はざりしならん。四もしキリスト甦へり給はざりし

五 ならば、我らの宣教も空しく、汝らの信仰もまた空しからん、一五 かつ我らは神の偽證人と認められん。我ら神は

キリストを甦へらせ給へりと證したればなり。もし死人の甦へることなくば、神はキリストを甦へらせ給はざり

一七 したらん。一六もし死人の甦へる事なくば、キリストも甦へり給はざりしならん。一七 若しキリスト甦へり給はざり

一八 したならば、汝らの信仰は空しく、汝等なほ罪に居らん。一八 然ればキリストに在りて眠りたる者も亡びしならん。一九

我等この世にあり、キリストに頼りて空しき望を懐くに過ぎずば、我らは凡ての人の中にて最も憫むべき者なり。

二〇 然れど正しくキリストは死人の中より甦へり、眠りたる者の初穂となり給へり。二一 それ人によりて死の來

二二 りし如く、死人の復活もまた人に由りて來れり。二三 凡ての人、アダムに由りて死ぬることく、凡ての人、キリス

二三 トに由りて生くべし。二三 而して各人その順序に隨ふ。まづ初穂なるキリスト、次はその來り給ふときキリストに

二四 屬する者なり。二四 次には終きたらん、その時キリストは、もろもろの權能・權威・權力を亡して、國を父なる神に

二五 付し給ふべし。二五 彼は凡ての敵をその足の下に置き給ふまで、王たらしざるを得ざるなり。二六 最終の敵なる死もま

二七 た亡されん。二七 『神は萬の物を彼の足の下に服はせ給ひ』たればなり。萬の物を彼に服はせたりと宣給ふときは、

二八 萬の物を服はせ給ひし者のその中になきこと明かなり。二八 萬の物かれに服ふときは、子も亦みづから萬の物を己

イ(提一七・三三)二 ホ 哥前一五・六を見よ ト 徒二・二四を見よ
三・八 提後二・一八 撒前四・一六 黙一 提後二・八 彼前一
口 撒前四・一四 四・一三 三
ハ 徒二・二四を見よ へ(哥後四・八、九 提 子 哥前一五・一八を見
二 羅四・二五 後三・一一) 三
イ(提一七・三三)二 五二 腓三・一一 〇・一四、二一・四
三・八 提後二・一八 撒前四・一六 黙一 提後二・八 彼前一
口 撒前四・一四 四・一三 三 二六・二三を見よ 二六・二三を見よ
ハ 徒二・二四を見よ へ(哥後四・八、九 提 子 哥前一五・一八を見
二 羅四・二五 後三・一一) 三 又 羅五・一二 五二 腓三・一一 〇・一四、二一・四
ル 羅五・二四―一八 カ 撒前二・一九を見よ 二二・四四 太二
ヲ 約一・二六 羅六 三 哥前六・一四、一五 四、二七 彼後一、 二七、二八(二八)
ヲ 約一・二六 羅六 三 哥前六・一四、一五 四、二七 彼後一、 二七、二八(二八)

一八・一九を見よ
 ヤ 前六・九を見よ
 コ (九二九)
 一八・一九を見よ
 マ 前二・一を見よ
 エ (結三七・三三)
 一八・一九を見よ
 ク 前二・一・二・三 (賽)
 ケ (太二二・二九 徒二)
 ヲ 前二・一・四〇を見よ
 ユ 前八・二一 前二・一・四
 シ (前二・一・四)
 一八・一九を見よ
 ア 前二・二・四
 ア 前二・二・四
 ヲ 前二・二・四
 サ 前二・二・一
 ム 前二・七を見よ
 ヒ 前二・七

に服はせ給ひし者に服はん。これ神は萬の物に於て萬の事となり給はん爲なり。

二九 もし復活なくば、死人の爲にバプテスマを受くるもの何をなすか、死人の甦へること全くなくば、死人の

三〇 ためにバプテスマを受くるは何の爲ぞ。三〇 また我らが何時も危険を冒すは何の爲ぞ。三一 兄弟よ、われらの主イエ

三一 ス・キリストに在りて、汝等につき我が有てる誇によりて誓ひ、我は日々死すと言ふ。三二 我がエペソにて獄と

闘ひしこと、若し人のごとき思にて爲ししならば、何の益あらんや。死人もし甦へる事なくば「我等いざ飲食せ

三三 ん、明日死ぬべければなり」三三 なんぢら欺かるな、悪しき交際は善き風儀を害ふなり。三四 なんぢら醒めて正しう

せよ、罪を犯すな。汝等のうちに神を知らぬ者あり、我が斯く言ふは汝らを辱しめんとしてなり。

三五 然れど人あるひは言はん、死人いかにして甦へるべきか、如何なる體をもて來るべきかと。三六 愚なる者

三七 よ、なんぢの播く所のもの先づ死なすば生きず。三七 又その播く所のものは後に成るべき體を播くにあらず、麥に

三八 ても、他の穀にても、ただ種粒のみ。三八 然るに神は御意に隨ひて之に體を予へ、おのおのの種にその體を予へた

三九 まふ。三九 凡ての肉、おなじ肉にあらず、人の肉あり、獸の肉あり、鳥の肉あり、魚の肉あり。四〇 天上の體あり、

四一 地上の體あり、されど天上の物の光榮は地上の物と異なり。四一 日の光榮あり、月の光榮あり、星の光榮あり、此

四二 の星は彼の星と光榮を異にす。四二 死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦へらせら

四三 れ、四三 卑しき物にて播かれ、光榮あるものに甦へらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦へらせられ、四四

四五 血氣の體にて播かれ、靈の體に甦へらせられん。血氣の體ある如く、また靈の體あり。四五 録して始の人アダム

四六 は、活ける者となれりとあるが如し。而して終のアダムは、生命を與ふる靈となれり。四六 靈のものは前にあら
 四七 ず、反つて血氣のもの前にありて靈のもの後にあり。四七 第一の人は地より出でて土に屬し、第二の人は天より出
 四八 でてたる者なり。四八 この土に屬する者に、すべて土に屬する者は似、この天に屬する者に、すべて天に屬する者は
 四九 似るなり。四九 我ら土に屬する者の形を有てるとく、天に屬する者の形をも有つべし。五〇 兄弟よ、われ之を言は
 五一 ん、血肉は神の國を嗣ぐこと能はず、朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことなし。五一 視よ、われ汝らに奧義を告げ
 五二 ん、我らは悉とく眠るにはあらず、五三 終のラツパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。ラツパ鳴りて死人は朽ちぬ
 五三 者に甦へり、我らは化するなり。五三 そは此の朽つる者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべ
 五四 ればなり。五四 此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき「死は勝に吞まれたり」
 五五 と録されたる言は成就すべし。五五 「死よ、なんぢの勝は何處にかある。死よ、なんぢの刺は何處にかある」五五 死の
 五七 刺は罪なり、罪の力は律法なり。五七 されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を與へた
 五八 まふ。五八 然れば我が愛する兄弟よ、確くして揺くことなく、常に勵みて主の事を務めよ、汝等その勞の、主にあ
 りて空しからぬを知らばなり。

第一六章

一 聖徒たちの爲にする寄附の事に就きては、汝らも我がガラテヤの諸教會に命ぜしごとく爲よ。二
 一週之首の日ごとに、各人その得る所にしたがひて己が家に貯へ置け、これ我が到らんとし始め
 て寄附を集むる事なからん爲なり。三 われ到らば、汝らを選ぶところの人々に添書をあたへ、汝らの恵む物をエ

イ(羅五・二四) 二例二・七、三・一九 五、七・八) ク徒一六・六を見よ
 ロ約五・二一、六・五 ホ勝三・二〇、二二 五、七・八) ヲ(後三・一四) ヤ(後四・一七)
 七、五八 羅八・二 へ例五・三 (提後四・二八) カ約五・二八を見よ 井(前二六・一〇) マ徒二〇・七を見よ
 (來九・二四) ト羅八・二九を見よ 又羅二・七を見よ ヨ撒前四・一五、一七 ネ羅五・二二を見よ ム(羅八・三九) 來二・
 ハ約三・三一 チ太一六・一七(約三) ル(前二・二二)を見よ 夕羅二・七を見よ ナ(羅三・二〇、四・一) 一四、一五 約(後五) 才徒二四・一七を見よ フ(後九・四、五)

コ(哥後八・一八、一
九)
エ哥後三・一

テ羅一五・二六を見よ
ア徒一九・二一を見よ
サ哥前四・一九を見よ
キ哥前一六・一一 徒
一五・三を見よ
ユ(哥後一・一五、一
六)

メ徒一八・二一を見よ
ミ徒二二を見よ
シ徒一八・一九を見よ
工徒一四・二七を見よ
ヒ徒一九・九
モ徒一六・一を見よ
セ哥前一五・五八

ス(提前四・一二 多二
一・二五)

イ徒一五・三三を見よ
ロ哥前一六・六を見よ
ハ徒一八・二四を見よ
ニ太二四・四二を見よ
ホ賽四六・八 加五・一

勝一・二七、四・一
撒前三・八 撒後二
一五(哥前一五・二)
母後 又徒一八・二二を見よ
一〇・一二
母前四・九 弗三・
一六、六、一〇 西
ワ羅一五・三一

チ哥前一四・一
リ哥前一・二六
又徒一八・二二を見よ
ル羅一六・五
ヲ哥前一六・一
一

カ撒前五・二二 來一
三・一七
ヨ(哥後七・六、七)
夕腓二・三〇 (哥後
一一・九)
レ哥後七・二三 門七、
二〇

ソ(勝二・二九 撒前
五・一二)

五四 ルサレムに携へ往かしめん。四もし我も往くべきならば、彼らは我と共に往くべし。五我マケドニヤを通らんとすれば、マケドニヤを過ぎて後に、汝らの許にゆかん。六斯て汝らの中に留りて或は冬を過すこともあらん、是わが何處に往くも汝らに送られん爲なり。七我は今なんぢらを途の次に見ることを欲せず、主ゆるし給はば、暫く汝らと偕に留らんことを望む。八われ五旬節まではエペソに留らんとす。九そは活動のために大なる門、わが前にひらけ、また逆ふ者も多ければなり。

二〇 テモテもし到らば慎みて汝等のうちに懼なく居らしめよ、彼は我と同じく主の業を務むる者なり。二一されば誰も之を卑むることなく、安らかに送りて我が許に來らしめよ、我かれが兄弟たちと共に來るを待てるなり。二三兄弟アポロに就きては我かれに兄弟たちと共に汝らに到らんことを懇ろに勧めたりしが、今は往くことを更に欲せず、然れど好き機を得ば往くべし。

二三 目を覺し、堅く信仰に立ち、雄々しく、かつ剛かれ。二四一切のこと愛をもて行へ。二五兄弟よ、ステパナの家はアカヤの初穂にして、彼らが身を委ねて聖徒に事へたることは、汝らの知る所なり。二六われ汝らに勸む、斯のごとき人々また凡て之とともに働きて勞する者に服せよ。二七我ステパナとポルトナトとアカイコとの來るを喜ぶ。かれらは汝らの居らぬを補ひたればなり。二八彼らは我が心と汝らの心とを安んじたり、斯のごとき者を認めよ。

一九 アジヤの諸教會なんぢらに安否を問ふ。アクラとプリスカ及びその家の教會、主に在りて熱るに汝らに安否を問ふ。二〇 すべての兄弟なんぢらに安否を問ふ。なんぢら潔き接吻をもて互に安否を問へ。

二一 我パウロ自筆をもて汝らに安否を問ふ。二三 もし人、主を愛せずば誑はるべし、我らの主きたり給ふ。二三 願くは主イエスの恩恵、なんぢらと偕にあらんことを。二四 わが愛はキリスト・イエスに在りて汝等すべての者とともに在るなり。

コリント人への前の書 をはり

イ徒一六・六を見よ 一八 撒後三・二七 二〇
口徒一八・二を見よ 門一九(羅一六・二) チ羅一六・二〇を見よ
ハ羅一六・五を見よ 二二
ニ羅一六・一六を見よ へ羅九・三を見よ
ホ加六・二一 西四・ト(腓四・五) 黙二二・

五・二一 或は「今また書き贈る、兄弟……すな」と譯す。 六・四 或は「さらば……すわらしめよ」と譯す。 一一・一九 或は「異端」と譯す。